

特 別 講 演

講演者のプロフィール

三宅和子（みやけ かずこ）

【略歴】

福岡県出身．筑波大学大学院地域研究研究科修了．博士（文学）．専門は社会言語学，語用論，日本語教育．東洋大学短期大学講師、助教授、東洋大学文学部助教授・教授を経て現在は名誉教授．

【主要業績（2000 年以降）】

『メディアとことば』1, 2, 4 巻（共編著 ひつじ書房 2004～2009）、『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』（共編著 ひつじ書房 2006）、『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』（ひつじ書房 2011）、『「配慮」はどのように示されるか』（シリーズ社会言語学 1）（共編著 ひつじ書房 2012）、『新・わくわく文法リスニング 100—耳で学ぶ日本語—』[1][2]（共著 凡人社 2017）、『移動とことば』『移動とことば』2（共編著 くろしお出版 2018, 2022）、『モビリティとことばをめぐる挑戦—「社会言語学」の新たな移動』（共編著 ひつじ書房 2019）、『境界と周縁—「社会言語学」の新たな地平』（共編著 ひつじ書房 2025）

変容するコミュニケーションを捉える —電子メディアを切り口に—

三宅和子（東洋大学名誉教授）

コミュニケーションの変容

20 世紀末から現在までの数十年の間に、コミュニケーションの姿が著しく変容してきました。変容の要因は多々ありますが、グローバル化と電子情報技術が日常生活に浸透し、大きな影響を与えてきたことは否めないでしょう。どこがどのように変わってきているのか、新たな目で現実を捉えなおす必要性が高まっています。しかし、流動化、複雑化、多様化を深める 21 世紀において、これまで所与のものと受け止められてきた物事の把握の仕方や視点、研究方法は、新しい事態にそのまま適応できるでしょうか。再度検討する必要があります¹。

この講演では、コミュニケーションの変容の一端を、電子メディア、特にモバイルメディアを介しての言語行動の調査結果に焦点を当てて考えたいと思います。

私の研究の中心には、「人間関係とことばの使われ方」と社会文化の関わりへの関心が継続してありました。その指向性から、1995 年あたりから若者が先陣を切って携帯電話を使い始めたとき、若者はなぜ携帯電話に夢中になるのか、どのようにして人間関係を調整しているのか、といった疑問に駆られて研究に着手しました。その後、モバイルメディアを使ったパーソナル・コミュニケーションは、携帯電話からスマートフォンへと使用機器が移り、SMS や携帯メールから LINE などのメッセージングアプリへと移行しつつ進展し、今では老若何女を問わず日常生活の深い部分にまで浸透しています。しかし、この間どのような変化が起こってきたかについては、残念ながらさほど研究が進んでいません。今の若い世代は誕生時からインターネットやモバイルメディアに囲まれていますので、現在が自然で当然な世界に感じられ、それなしの状況は想像するのが難しいことでしょう。2000 年代の学生は「ケータイをもたずにどうやって会う約束をしたり場所を決めたりしたんですか」とよく私に聞きました。今では高齢者でも歩きスマホをしている時代ですから、そういう問いは沸き起こりもしないでしょう。しかし、断続的にモバイルメディアの研究を続けていると、以前には有意義だった問いが意味をなさなくなったり、以前には目立った言語行動が影を潜めたり新しい言語行動が見られたりすることに気づきます。ここでは、最近行った 2 つの調査²から、LINE における方言とジェンダーを例に、どのようなことが

¹ 三宅・新井編（2025）は、物事の把握や研究のために弓引かれた境界とそこから生み出される周縁に焦点を当て、既存の研究観を超えることを試みたものである。

² 三宅和子（in press）「モバイルメディアに現れる関西方言—LINE チャットで方言を話す」とは—、三宅和子（in press）『LINE のジェンダー—若者の言語意識と実態』をさす。所収予定の書籍が未刊のため、参考文献欄には編者、書籍名ともに提示していない。

変わってきているかを考えます。またこれまでの研究では見えていなかったことについても疑問を投げかけてみたいと思います。

LINE は現在、国民の大半が利用しているメッセージングアプリで、全世代平均で 94.9%、20～40 代ではほぼ 100%近くが利用しています（総務省情報通信政策研究所 2024）。しかし、X やインスタグラムなどのソーシャルメディアとは異なり、アプリ内のやりとりは個人間で共有されるにとどまり、言語行動の変化が見えにくい傾向にあります。だからこそ、研究の対象とすべきではないでしょうか。

LINE の中の方言

方言は文字で表されることがない音声言語でした。方言グッズや方言看板などはあったものの、個人間で日常的に話す方言が文字となって現れることは最近までありませんでした。しかし、モバイルメディアでやりとりすることが常態となると、当然ながら日常的な「話しことば」も方言もそこに投影されます。

ここでは、積極的方言使用者として知られる関西方言を対象にした意識調査と実際の談話の分析を紹介します。そしてモバイルメディア内での方言的要素の現れ方と、方言を「話す」ということの意味について、考えます。

意識調査からは、方言の使用が対面会話より意識的に行われることや、方言の親密コードとしての機能が強化される可能性が示唆されました。談話データからは、対面会話とは異なる諸相がみられました。例えば、語彙に「方言的要素」がないやりとりがかなりの数あり、談話者相互の方言使用が非対称の例もありました。親しい間柄では、頭の中でアクセントやイントネーションを伴ってテキストを打ち、受け取る側も頭の中で再生しながら読んでおり、方言的要素がなくとも違和感なくコミュニケーションが行われていることもわかりました。これらの結果は、三宅（2006）の携帯メールの調査、や三宅（2018a, 2018b）の LINE チャットの調査とも異なる傾向を示しており、モバイルメディアの日常生活へのさらなる浸透を感じさせます。

LINE の中のジェンダー

もう一つはジェンダーに関する言語使用の「意識」と「実態」を比較した調査です。意識と実態のあいだを「規範意識」、「使用意識」、「使用実態」の 3 つに分け、相互の違いと関連を考えました。使用実態に関しては、例えば、対面会話研究で男女差が依然残ると指摘されていた「すげー（すごい）」「わりー（悪い）」などの音変化（村松 2005）も女性が使っており、ジェンダー言語の「中性化」、あるいは「女性の女性語不使用、男性語使用」の状況が、LINE 上では大きく進んでいることが示唆されました。しかし、提示された LINE チャットにおける談話者の性別を判断する意識調査の正解率は著しく低いものでした（最高 44.4%、最低 3.2%）。判断理由として最も多く言及されていたのは「ことば遣い」でした。女性の使用として判断されたものには、「ねえねえ」や相手への名前の呼びかけ、「な

んすけど」などの若者敬語、「～てるんだけど」などの縮約表現、「私」などの自称詞が挙がっていました。男性では「いいっすか」「あざす」などの若者敬語、「おお～いいよ」「ど～やんの」「だりーもん」などの「ややぞんざい」な表現が挙がっていました。実際には後者はすべて女性にも使われていました。ここから、若者の使用意識には、従来からの規範意識に基づくジェンダーバイアスが継承されており、使用実態に追い付いていないことが明らかになりました。

今後期待したいこと

これまでの言語研究において基盤となってきたのは、対面による言語使用でした。しかし現在ではコミュニケーションの多くが電子メディアを介して行われるようになってきています。従来の研究に加え、LINEをはじめとする様々な電子的な場における言語行動の異なりをさらに深く追究する研究が、今後のコミュニケーション全般のゆくえを考える上で、重要な意味をもってくると考えます。また、そのためには、旧来の言語観、方法論などを超えたアプローチが必要になってくるのではないのでしょうか。

参考文献

- 総務省情報通信政策研究所（2024）「総務省令和5年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査
報告書」https://www.soumu.go.jp/main_content/000976477.pdf
- 三宅和子（2006）「携帯メールに現れる方言—『親しさ志向』をキーワードに」『日本語学』25(1)：pp. 18-31
明治書院
- 三宅和子（2018a）「SNSにおける方言使用の実態—エセ方言はいつ、誰に使うのか—」『文学論藻』92：pp. 1-15 東洋大学
- 三宅和子（2018b）「LINEの中の方言一場と関係性を醸成する言語資源—」小林隆編『コミュニケーションの方言学』pp. 319-337. ひつじ書房
- 三宅和子・新井保裕，編（2025）『境界と周縁—社会言語学の新たな地平』（ひつじ書房）
- 三宅和子（in press）「モバイルメディアに現れる関西方言—LINEチャットで方言を話す」とは—」
- 三宅和子（in press）「LINEの中のジェンダー—若者の言語意識と実態」
- 松村瑞子（2005）「日本語のジェンダー表現と話法」『言語文化叢書』15巻 pp. 20-29. 九州大学大学院言語文化研究院